

戦時下の土浦中学生4 ～戦時体制の強化～

日中戦争の拡大とそれに伴う国際情勢の緊迫化とにより、戦時動員体制は確立されていきました。総力戦遂行に向け、教育現場では、出征兵士の送迎・戦勝祈願・教育勅語奉読・時局講演・勤労奉仕などを学校行事として行うようになりました。更に、修業年限の短縮や勤労奉仕の期間延長も図られていきました。文中の【 】内は筆者による注記です。

御真影と奉安殿

天皇・皇后の公式の肖像写真である御真影は、宮内省から各学校に下賜【実際は「貸与」だった】され、明治初期から崇拜の対象となりました。したがって、非常に慎重な取り扱いが要求され、校長の責任で厳重に管理され、1920年代からは奉安庫や奉安殿に安置され、四方拝・紀元節・天長節・明治節での儀式の際に掲出されました。

本校には、1910(明治43)年11月1日に下賜されました。幸津國太郎校長が県庁で拝受し、列車で、午後2時17分、土浦駅に到着しました。その際、4・5年生は武装をして、3年生以下は徒手で出迎えました。警察官が先導し、4・5年生は校長の奉戴する御真影の儀仗隊となり、3年生以下は随従の隊形をなして護衛し、真鍋台の校舎まで厳かに行進して、予め設けられていた奉安所に奉じ、職員一同が順次拝しました。奉安所は旧本館玄関左側の部屋【戦後は進路指導室として使われた】に設けられました。天皇が新たに即位するとその御真影が下賜され【前天皇の御真影は奉還した】、校長が県庁で拝受して、全校生徒が同様に奉迎しました。

1928(昭和3)年11月には昭和天皇即位の礼を記念して、現在の進修記念館付近に奉安殿が建設され、生徒や職員は「登下校の際などには、丁寧な敬礼をするように。」と指導されました。

教育勅語奉戴

1930年代に入ると、「教育に関する勅語(教育勅語・1890・明治23年10月30日発布)は、国民教育の精神的支柱として神聖化されるようになりました。「教育勅語」の写しは、殆どの学校で「御真影」と

ともに奉安庫・奉安殿などの特別な場所に安置されるようになり、生徒は「教育勅語」の全文を暗誦させられました。翌1938(昭和12)年に日中戦争が勃発し、翌1938(昭和12)年に国家総動員法が制定・施行されると、その体制を正当化するために利用され、更にその補完のために、1939年には「青少年学徒二賜ハリタル勅語」が發布されました。これを受けて教育現場では、出征兵士の送迎・戦勝祈願・教育勅語奉読・時局講演・勤労奉仕などが、戦時体制下の学校行事として行われるようになりました。

戦時体制の確立

1938年6月、文部省は、中等学校低学年の休業時には3日、その他の学年は5日を標準として、集団勤労作業の実施を通知しました(「集団的勤労作業運動実施二関スル件」)。翌1939年3月には、集団勤労作業を漸次恒久化し、学校の休業時だけでなく随時これを行い、正課に準じて取り扱うことを指示しました。更に1941年2月の「青少年学徒食糧飼料等増産運動実施要項」において、文部省は「一年7月通ジ三十日以内ノ日数ハ授業ヲ廃シ」て作業に充てることができ、その日数・時数は授業を実施したものと認めました。また、同年8月には、「学校報国団ノ体制確立方」の訓令を発し、学校ごとに学校報国隊(団)を組織して、軍事的要請に従って学徒を労務に動員し得る体制の構築を図りました。土浦中学では訓令に先んじて同年5月、生徒会である「進修会」が「土浦中学校進修報国団」に改組され、これまで部であった野球部・水泳部・剣道部などが班となり、新たに設立された滑空班・修練班・研究班などととも、統括組織として設けられた総務部・鍛錬部・国防部・学芸部・生活部のいずれかに属することになりました。

団長には校長が就き、従来の部顧問教師が班長となって、生徒役員は校長が任命するものとなりました。県学務課内には、本部に当たる「茨城県中等学校報国団【団長には県知事が就任した】」が置かれ、中堅皇国民生徒の錬成のための場となり、統後青少年学徒への指導の更なる強化が図られました。

その年の10月には「進修報国隊」も結成されました。これは、いよいよ学徒にも臨戦態勢が求められた結果であり、学校教育全体が「防衛訓練」の名の下に軍隊化していくものでした。校長が隊長で、学校全体が大隊・中隊・小隊に区分され、隊長の命令一下、全生徒が即座に各自の部署に就けるように統制が強化されました。また、学年・学級を超えた通学地域ごとに一隊を構成した実践的な組織も創られ、勤労動員や軍事訓練の基盤となりました。

11月、茨城県は、報国隊の活動に特例を設けました。従来、年間授業カートの日数は30日以内でしたが、30日を超えて軍事訓練や勤労奉仕に充ててもよい旨の通達でした。

この年の12月8日、真珠湾攻撃により太平洋戦争が始まると、土浦中学でも従来の援農作業に加えて、霞ヶ浦海軍航空隊や第一海軍航空廠での軍役奉仕や満蒙開拓幹部訓練所【常磐線内原駅南東約1kmにある日本農業実践学園の農場一帯】での宿泊訓練・防空演習などが行われるようになりました。

中42回(1938・昭和13年4月入学、1943・昭和18年3月卒業)の荒木淳は土浦中学での5年間の生活を回顧して、

「(略) 僕等の生活は文字通り多彩なものであった。【日中戦争から】大東亞戦争に至る迄に第二次歐洲大戰の勃發有り、獨ソ開戦あり或ひは日獨伊三國條約の成立が有り、一方國內的には皇紀



現在の進修学習館付近にあった「奉安殿」(真後ろのヒマラヤ杉は現存する)(中38回『卒業アルバム』昭和14年3月発刊より)と、「茨城県立土浦中学校進修報国隊旗」(『進修』第46号より)

二千六百年の大祝典が有り、僅か五年の
中學校生活の中に幾多の歴史的事件に
遭遇した。僕等は幾多の國民的喜び、國
民的苦しみを経験したと共に一方に於
ては過渡期の學生として多くの苦しみ
或は樂しみを味つて來た事は否めない。
(略) とまれ土中五年間の生活は限り
なく樂しかつた。しみじみ思ひ平凡に送
つた五年間をつくづくと後悔すると共
に今後數年の土中生活を控へられる下
級生諸君には何年前車の轍を見られて、
樂しい學校生活を有意義に送られん事
を望んで止まない。」(『進修第46号
(1943・昭和18年2月15日発刊)』と述べ、
戦争の波が押し寄せる中、何とか自由と
青春を享受できた土中生活に感謝し、後
輩にも同様の生活を送つてほしいと願
つています。

防空演習

第一次世界大戦後、航空機の性能が飛
躍的に向上して空襲の脅威が増大する
と、軍・官・民、全てに亘つての防空体
制が必要となりました。1928(昭和3)年
の大阪での軍・官・民合同の防空演習を
皮切りに、既に主要都市では防空演習が
行われていました。こうした動きを背景
に、防空法の制定が図られました。陸
・海・内務その他の省庁の意見が容易
に一致せず、1937年に至つて漸く勅令が
公布・施行されました。防空法には、空
襲による被害を防止・軽減するため、
陸・海軍による防空作戦に即応する民間
の態勢の整備、即ち、灯火管制、消防・
防毒、避難及び救護、監視・警報などを
迅速に行わせること、そのために道府県
に防空計画を策定させ、態勢を整えさせ
ること、などが定められていました。当
初は防空思想の普及や防空訓練が主で
したが、1941年に内容が強化され、更に
太平洋戦争の戦局悪化に伴つて、1943年

には、疎開や偽装、非常用物資の配給な
どに係る条文が加えられました。

防空法に基づいて各地で防空演習が
行われましたが、1939年に土浦町で実施
された防空演習の様を2年生の田崎
嘉邦(中42回)は『進修第43号(1940年3
月1日発刊)』に『防空演習』と題して次
のように記しています。

「『東部防衛司令部発表! 午後七時
東部防衛司令部全管區に亘り空襲警報
が発せられました!』突然ラヂオが鳴り
出した。今まで勉強してゐた僕は方々の
電燈を消しに歩いた。最後に座敷の電燈
を消さうとした時、よい音で聞えてゐる
警察の半鐘が鳴り出した。續いて甲高い
仲町の半鐘が鳴り出した。勉強室へ戻つ
て來ると表の方が大部ざわつて居る。
出て見るともんぺ姿の家庭防火群の人
達が集つてゐて、その中に警防團員らし
い腕章をつけた消防姿の人が何事か訓
示を與へてゐた。僕は自分の家の管制状
況を外から一通り調べ、少しも光の洩れ
てゐないのを見てとつて安心して家の
中に入った。中では子供達が『空襲警
報々々々々』とさうす暗い部屋の中をあぶ
なつかしい足取りで駆け廻つてゐた。僕
は一人二階にのぼつて、火鉢の側へ仰向
きにねころんだ。ちつと耳を澄ますと、
階下の子供達のわめき聲や外を叫んで
あるく警防團員の甲高い聲が耳につく。
と急に表の人達がざわめき始めた。何か
起るなど直感した時、ガンガラガンガラ
とバケツを敲く音と共に『焼夷彈落下!』
と叫ぶ聲が聞えた。がばつとはね起きて
窓から表をのぞくと、もう道一杯に焼夷
彈が燃えひろがつて真中から眞白い花
火の様な火花がシューシューと音を立
てながらふき出してゐた。バケツはまた
敲かれてゐる。家庭防火群の人達は、水
と砂とを上からバサツとぶつけて向
ふへ走つて行つた。そして再三、砂をぶ

つかけた。さしもの焼夷彈も勇敢な家庭
防火群の働で段々と衰へて、仕舞には煙
を残して消えていつた。緊張して見てゐ
た人々は皆口々に何か語りながらこれ
も段々と立ち去つて行つた。『今の動作
は大變良好!』と警察から來た人が大聲
で叫んだ。」



防空演習
バケツリレーによる消火作業
(右、『写真記録茨城20世紀』
より)と全町内が参加して行
われる訓練(下、『ふるさと
の想い出写真集・土浦』より)。



翌1940年9月には本校においても初め
ての防空演習が行われ、3年生の木口公
晴(中42回)は、土中生の訓練振りを記
しています(『進修第44号(1941年3月1
日発刊)』)。

「先週の金曜日に學校内の防空演習を
始めてやつて見た。先ず朝禮の時に色々
注意を受け、どんな事をやるのだから解ら
ぬので何となく落着かぬ氣持で授業を受
けた。短縮【授業】で晝まで何事もな
く過ぎてしまつた。放課後清水【繁次郎】
先生が大きな眞新しい手拭を持つて來
られた。教室で色々話を聞いてゐる中に
野球部の者が廊下を走りまはつて何や
ら怒鳴つた。大勢で一度に言ふので何を
言つてゐるのかさつぱり分らない。了る

とドアを開けて通信文を持つて來た。先
生がそれを讀まれた。C國の飛行機が仙
臺上空を過ぎたと云ふ想定であつた。間
もなく遠くの方でガンガンと鳴つた。そ
ら瓦斯だと言ふので防毒面代用の手拭
を着けた。先生は大きな手拭をつける時
『オツホン』と一つ咳拂ひをしたので、
皆がどつと笑つた。暫らくの間沈黙が續
いた。突然玄關の鐘が四つ鳴らされた。
愈々全校生徒が校庭の隅に避難するこ
とになつた。化學實驗室の東側に焼夷彈
が落ちて、水泳部員が水や砂をぶつかけ
てゐた。なかなか消えない。『ドガン』
と思つたより大きな音がして破裂した。
火は益々盛んに燃え擴がる一方である。應
援隊が我々避難民中から繰出された。野
球部員が走つて來て表門附近に大きな
焼夷彈を落されて、御眞影奉安庫は危く
なり只今奉遷中である旨を報告した。漸
く實戰的になつた。向ふを御眞影を奉遷
し通るのに對して、庭球部の者の號令で
最敬禮をした。作業室附近には何部の者
だか、車やリヤカーを引いて走つてゐ
た。實驗室前の焼夷彈も漸くプールの水
で鎮火した。

斯くして防空演習の一日は終つた。
土浦町民の訓練はともかく、土中生の
それは眞剣味に欠け、ドタバタしたもの
であつたようです。当時、生徒たちは、
空襲などある筈がないと思ひ込んでい
ました。幸いに土浦は空襲を受けません
でしたが、東京をはじめとする全国の主
要都市が灰燼に歸したことは周知のと
おりです。軍の防空システムは全く機能
せず【日本軍のB29撃墜率は、僅かに0.17%
だつた】、木造家屋中心の日本に對する
焼夷彈の雨には、日頃の訓練も役に立た
ず、それどころか、消火活動や救助活動
を行つてゐるうちに逃げ遅れるなどし
て、犠牲者を増やしてしまいました。